

歴史の中の 女たち

第 40 回

ソレダ・ロマン

(1835 ~ 1924 年)

—コロンビアの影の大統領—

伊藤 滋子

ソレダ・ロマンは南米大陸最大の港町の一つであるコロンビアのカルタヘナに生まれた。父マヌエル・ロマンはスペイン南部のモゲール出身の人で、パリで薬学を学び、1834 年、キニーネの原料のキナを求めてコロンビアにやってきたが、カルタヘナの近くで船が難破し、そのままこの地に留まってしまった。そして化学の教師となり、生徒の一人ラファエラ・ボランコと結婚、二人の間にはソレダを頭に次々と 17 人の子供が生まれた。うち成人したのは 10 人だけで、子供たちは当時の伝統的なカトリック教育のもとで育てられた。

その後、父はカルタヘナに今も残るコロンビアで初めての化学研究所を創設して薬局を開き、事業は大変成功した。だが、母が幼い子供たちを残して亡くなったため、大家族の長女だったソレダは母に代わって家庭を切り盛りし、幼い弟妹の面倒を見ながら父の薬局を手伝い、訪れてくる病人たちの手当てをした。女性は家に引きこもってひっそりと暮らすのが普通の時代だったが、このような境遇により彼女は否応なく他の女性とはかなり違った生き方をすることとなった。17 歳ぐらいの時、恐らく父の勧めに従って、同じカルタヘナに住む裕福なカタルーニャ人の商人の息子と婚約する。だが母の死などで結婚はのびのびになって実現には至らず、結局 5 年後に解消されたが、彼女が普通の家庭婦人となることに飽き足りないものを感じたからかもしれない。

ロマン薬局はカルタヘナでも多くの人々が訪れ、町



ソレダ・ロマン

Soledad Román (出所) https://es.wikipedia.org/wiki/Soledad_Rom%C3%A1n_de_N%C3%BA%C3%B1ez

の社交場のような役割も果たしていたから、彼女はおのずとこの地方の政治・経済の指導者たちとも親しくなり、彼らとの会話のなかから政治に興味を持つようになっていった。

19 世紀のコロンビアはようやくスペインからの独立を果たした後も、保守派、穏健自由派、ラジカル自由派が互いに入り乱れて、利害によって派閥を形成しては離反することを繰り返し、熾烈な権力争いが繰り返られていた。19 世紀半ば、その中で概ね自由派が権力を握ったが、1857 年、保守党の創始者であるオスピナ将軍が大統領 (1858 ~ 61 年) に就く。だが 3 年後、自由派に倒されてカルタヘナの獄につながれた時、保守派のソレダは、オスピナ将軍を救出してグアテマラへ亡命させる陰謀に加担していた。カルタヘナの司教とも親しく、直々に告解を聴いてもらえて友人たちから羨ましがられるほどであった。

オスピナのあと半年間臨時大統領を務めたニエト・ヒルは元カルタヘナの知事で自由派だがソレダの父の友人であった。そして彼が知事だった頃その秘書を務めていたのが、後にソレダの夫となるラファエル・ヌニェス (1825 ~ 94 年) で、二人はこの頃に出会っている。ソレダの婚約解消後、ヌニェスは彼女にプロポーズしたと言われるが、当時ヌニェスはすでに妻とは別居していたとはいえ、カトリックでは離婚は認められず、敬虔な信者だったソレダが彼を受け入れるはずも

なかった。

伝記作家によれば、「くぼんだ青い目、細やかな金髪、頬骨が出た青白い顔、人並み外れた容貌は彼を一見醜く見せるが、形容しがたい魔術的な男性的魅力をたたえる知性あふれる青年」と形容され、この時すでに社会的地位を占め、自由派の中では名を知られるほど頭のめぐりが速く、育ちのよい優雅さを備えている若者であったという。年齢はソレダより10歳年上である。

ヌニェスもやはりカルタヘナに生まれ、軍人の父を持ち15歳で内乱に参加した。その後カルタヘナの大学で法学部を卒業したあと、パナマの地方判事(20歳)、カルタヘナ知事の補佐や地方官庁の長官、カルタヘナ大学の文学と哲学の教授、学長(27歳)などを務め、自由派の新聞に自分の政治的見解を寄稿する論客でもあった。彼は26歳でパナマの人、ドロレス・ガジェゴと結婚し、2児をもうけたが、その結婚は愛のためというよりも、彼女が当時パナマで最も有力な政治家で、のちに短期間大統領となるオバルディア(1854～55年)の妻の妹ということに魅力を感じたものであったようだ。実際、彼はこの義兄の庇護のもとに、その2年後にはパナマ代表の上院議員に選出され、それが中央政界へ躍り出る足掛かりとなった。だが妻はパナマにとどまったまま、一度も首都ボゴタには同行せず、結婚は早い段階で破綻していたようだ。

1853年上院議員となったヌニェスは地方政治の役職を辞して単身ボゴタへ行き、それ以来彼の華々しい政治的キャリアが始まる。その当時議会では憲法改定が論議されている最中だった。ヌニェスは自由派の議員として、無制限な個人の私益追及に反対し、教会と国家の分離、選挙で州知事を選ぶことなどを主張、弁舌家として注目を浴びた。間もなく下院の副議長に選出されて議会政治家として頭角を現していく。一時クーデターで議会が解散された時を除いて、その後10年間、次々と変わる自由派の大統領の元で内務長官、国防大臣、財務大臣、金融庁長官などを歴任し、中央銀行の設立、通貨改革、刑法の確立、教会と政府の分離、選挙による知事の選出などを目指して働いた。

1863年、ヌニェスは自由主義派の勝利宣言ともいえる「リオネグロ憲法」の成立にも参加したが、その憲法が発表される前に議員を辞してニューヨークへ渡った。実は彼はその数年前から、グレゴリア・アロという若い女性との、生涯で最も情熱的な恋愛の真っ最中であった。グレゴリアには40歳も年上のイギリス人の

夫がいたが、満たされない結婚生活から逃避するために文学を愛し、ヌニェスとはボゴタの文学同好会で知り合った。彼は詩を作るロマンチストでもあり、現在のコロンビア国歌は彼が若い時に故郷のカルタヘナに捧げた詩である。グレゴリアが夫と別れてニューヨークへ行ったあと、ラジカル自由派による余りにも過激な政治に絶望したヌニェスはそのあとを追ったのだった。

彼はニューヨークで偽名を使ってアメリカや中南米の様々なスペイン語の新聞に記事を書いて生計をたてたが、その後フランスのル・アーヴルの領事に任命されて、グレゴリアを伴って赴任した。主にパリに住んでフランスでの生活を満喫したようだが、次に彼が英国のリバプールへの転勤を命じられた時、彼女はヌニェスと別れてニューヨークへ去って行った。

1874年末、外交から退きカルタヘナに帰ったヌニェスは真っ先に母を訪問したあと、町外れのカブレロに住むソレダの家に行き、結婚を申し込んだ。この年ソレダの父が亡くなり、薬局は弟の一人が継ぎ、独身の彼女の将来を心配した父はカブレラの家と現金2,000ペソを遺産として遺してくれた。ソレダはそのお金でたばこ店を開き、自ら店頭に立って店を経営していた。若い時から父の薬局を切り盛りしていた彼女にとっては当然のことだったが、それは上品な女性のすることではないと、人々からは非難がましい目で見られていた。またソレダにとってもヌニェスの様々な噂は百も承知だったが、彼はすでに自由派の重要人物であり、こんどはソレダもむげに断りはしなかった。昔と違って二人とも成熟した大人だった。

一方、ヌニェスが不在中だった10年余りの間に、国政の方はラジカル自由派の「リオネグロ憲法」体制による過度な連邦主義のおかげで中央政府による政治は全く機能しなくなり、経済もほとんど破綻状態に陥っていた。全国規模のインフラ整備が一向に進まないため、地方間の交易は途絶え、金とコーヒーの輸出が少しづつ増えてはいたが、伝統的な輸出産業であったたばこ、藍、キニーネは生産が落ち込んでいた。

このような手詰まり状況の中で、1876年、ヌニェスは穏健自由派のグループから推されて大統領選に出馬したが敗退する。彼はカルタヘナに帰り、短期間ボリバル州知事に就いたが、この時ソレダの仲介により保守派の協力を得たことから、以来政治的にも保守派と協調するようになった。同時にこの期間に彼女との関



ラファエル・ヌニェス

Rafael Núñez (出所) https://es.wikipedia.org/wiki/Rafael_N%C3%BA%C3%B1ez

係も進展する。1877年、ソレダは第二人に付き添われて、心臓の専門医の診断を受けるためにパリに行ったが、この時パリの領事館に結婚届けを提出した。新郎52歳、新婦42歳である。ヌニェスは外交案件のためニューヨークに滞在中で、ソレダの弟が花婿の代理人となって結婚届けに署名した。ヌニェスがようやくカルタヘナのソレダの元に現れたのはそれから一年後だった。

ヌニェスは次の大統領選挙に向けて、ラジカル自由派に反対する穏健自由派と新しく取り込んだ保守派を率い、《レヘネラシオン（再生）運動》を提唱した。彼はまだヨーロッパ滞在中にルーアンで『社会批判論』を出版し、《レヘネラシオン運動》を初めて世に問うていた。その主張は、「我々は行政の再生か、あるいは国の破滅かという分岐点に立たされている。産業に投資し、道路や鉄道を建設してコロンビアの産業を保護・振興するためには連邦主義を捨てて中央政府に大きな権限を与えなければならない。そうして外国の投資を呼び込む状況を作り出し、国家改革を推し進めること以外に、コロンビア再生の道はない」というものであった。それはまさに中央集権という、保守派の主張であった。大統領選でラジカル自由派はあらゆる手段に訴えて彼を阻止しようとしたが、9州のうち8州でヌニェスが勝利し、彼はついに1880年、合衆国大統領となった。

だがソレダはボゴタに同行することをためらい、カルタヘナにとどまったままだった。

彼らの結婚は大きな波紋を呼び、拒絶反応を巻き起こしていた。ヌニェスはドローレス・ガジェゴと法律上は1872年にパナマの最高裁判所で正式に離婚手続きをしているが、教会は離婚を認めないし、彼を目の敵

にする政敵のラジカル派からはそれを逆手にとって二重結婚者と呼ばれ続けた。2年間の任期はいかにも短かったが、ともかくもヌニェスは《レヘネラシオン》に取り掛かった。まず国立銀行を設立し、金本位制を廃して紙幣を発行し、各州バラバラだった財政を一本化、ラジカル派が各教育機関に与えていた自治を断ち、大統領が学長の任命権を持つ、また学生の政治活動を禁止するなどの改革を行った。官僚も徐々に保守派に切り換えて行き、これらの措置によってラジカル派はずい分勢力を削がれることとなった。公共事業としてはパナマ運河の着工開始、ボゴタからヒラルドーへの鉄道の敷設があげられる。ヒラルドーはカリブ海からマグダレナ河をさかのぼってきた時の港で、交通の要所であった。

1884年にヌニェスが再選されると、今度はソレダはボゴタに同行した。閉鎖的なボゴタの上流社会は当初彼女を受け容れようとしなかったが、イエズス会士のボゴタ大司教パウールが大変包容力のある人物で、そのとりなしによって、徐々に打ち解けることができた。今まで彼女を毛嫌いしていた人もいったん会ってみれば皆彼女の人格に惹かれてそのファンになるのだった。ヌニェスは1894年に亡くなるまで、それから4期大統領に選出されるのだが、ソレダはその10年間、常に彼に付き添い、コロンビア史上最も影響力を持った女性、と言われる。

ソレダがボゴタに行ってもなく《レヘネラシオン》に反対するラジカル自由派がヌニェス政権転覆を謀って反乱を起こした。この時ヌニェスは病床にあり、ソレダは医者信用しない彼のために薬を調合して看病し、彼が死んだのではないかと噂を払拭するために、彼を倒れないように紐で椅子に縛りつけて大統領宮殿のバルコニーから集まった群衆に手を振らせなければならなかった。ヌニェスが反乱鎮圧の陣頭指揮をとれるような状態ではなかったので、ソレダはすべての情報に目を通し、時には夫に代わって重要な決定も下した。パウール大司教から、敵に寝返った罪で銃殺される男の助命嘆願を頼まれた時、彼女は男が国外に出るという条件で恩赦を与えたが、後でそれを知らされたヌニェスは「私はソレダから平手打ちをくらわれたよ」と冗談まじりに嘆いたという。彼女が昔から培ってきた保守派の要人たちとの友情に訴えて政府を支持するように説得したお陰で、全国規模に広がった反乱も一年がかりで辛うじて鎮圧することができた。

ヌニェスは大統領宮殿のバルコニーから「1863年憲法（リオネグロ憲法）はもう存在しない」という有名な演説を行って、各州2名の代議員からなる憲法審議会が始まった。

翌1886年公布された新憲法の最も重要な点は連邦制が廃止されて国名が合衆国から共和国へ、州は県へと変わり、中央集権的な国家体制となったことである。大統領の任期も6年に延長され、権限が大幅に強化された。この憲法は少しの修正はあったものの1991年まで続き、コロンビアでは一番長く続いた憲法となった。

1887年にはラジカル派政権の反教會的な政策によって長く断絶していたローマ法王庁との和解が成立し、コンコルダト（宗教協約）が結ばれた。その仲介の労を取ったのはソレダの良き理解者であった大司教パウールであった。ヌニェスが保守党と組んだことがコンコルダトを推し進める要因となったが、ソレダの影響も見逃せない。彼女はヌニェスとの結婚以来、離婚を認めない教会から締め出され、それが敬虔な信者だった彼女の心の重荷となっており、政府と教会との和解を強く望んでいた。ヌニェスは彼女が心の平穏を取り戻せるように教会に対して大幅な妥協をした。その主な内容は公教育におけるカトリック教育の義務化、出版物の検閲（ダーウィンやスペンサーの著作を禁止）、出生、死亡、結婚などの届出は教会が管理すること、以前の政権によってはく奪された教会財産の返還などである。まるでコロニアル時代に戻ったようだが、教会は大きな勢力を回復し、混迷を続けていた社会秩序を再構築するうえで重要な役割を果たした。



クリマコ・カルデロン著『コロンビア1893年』に掲載されたカブレロの家と御堂。ソレダが父から相続し、ヌニェスと共に晩年を過ごしたカルタヘナの「カブレロの家」。内部はヌニェスが使った時のままに保存されており、右側がヌニェスが建てた御堂。現在家は記念館、御堂は地域の教会となっている

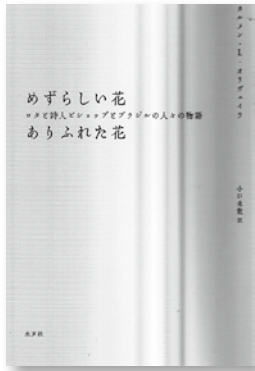
（出所）<https://fr.wikipedia.org/wiki/RafaelIN%C3%BA%C3%B1ez>

1888年、病気がちのヌニェスは大統領を辞してカルタヘナに帰り、カブレロの家で新聞に寄稿する記事を書くことに専念した（ラジカル派の人々はこれを政治のリモート・コントロールとしていたが…）。その翌年パナマで暮らしていたヌニェスの最初の妻ドロースが亡くなる。毒薬による死であったが、自殺か他殺かは不明だった。だが彼女の死でヌニェスとソレダの教会における結婚が可能となり、それから1ヶ月後に結婚式が挙げられた。ソレダはようやく教会の認可のもとに、ヌニェスの死までの5年間を心穏やかに暮らすことができた。

ヌニェスは1892年にまた大統領に選ばれるが、もうボゴタには戻らず、実質的な政治は副大統領に任せたままほとんど政治の圏外に留まり、1894年、名目上は大統領のまま他界した。議会は彼の功績を記念するために未亡人に慰労金を贈ろうとしたが、ソレダは本当は困窮していたにもかかわらず、いかなる援助も地位も拒絶し、それから30年間、カブレロでつましく暮らした。ヌニェスはその昔、自分との結婚によって教会に出入りできなくなったソレダのためにカブレロの家の側に小さな御堂を建てており、二人はそこに一緒に埋葬されている。

「歴史の中の女たち」は今回をもちまして連載を終わらせていただくことになりました。10年間、ご愛読ありがとうございました。

（いとう しげこ）



『めずらしい花 ありふれた花 ーロタと詩人ビショッポとブラジルの人々の物語』

カルメン L. オリヴェイラ 小口未散訳 水声社
2016 年 2 月 336 頁 3,500 円+税 ISBN978-4-8010-013102

リオデジャネイロのボタフォゴ海岸沿いに美しい公園がある。環境と開発に関するリオ宣言を出した環境と開発に関する国連会議の会場にもなったが、その公園建設を発案し実現に奔走しながら軍政の発足で失脚した女性建築家ロタ・ヂ・マセード・ソアレス（1910～67 年）と、米国の女流詩人エリザベス・ビショッポ（1911～79 年）の出会いと愛の生活、別れを追った評伝で、著者はリオに生まれ米国で学んだ女性作家。

1951 年に創作に行き詰まってリオにきたビショッポは、友人メアリーの紹介でロタと出会い、熱帯果実アレルギーで体調を崩したことからロタの世話になり、ロタが設計して建設中のペトロポリスの山間の家に移り、「家庭」として暮らしを営むことになった。この家はビエンナーレ建築賞を受賞し、ビショッポも 1956 年にピューリッツァー賞の詩部門を受賞したが、ボタフォゴ公園建設の仕事に打ち込むロタとビショッポの飲酒依存、ロタが政治に翻弄されて公園事業から放逐されて心身とも傷ついたことから二人の関係は破綻した。その後、米国に戻ったビショッポは詩人として名声を集めるが、ロタは 1967 年にビショッポを追ってニューヨークに渡るが事故か自殺かで生涯を閉じた。

ビショッポについては著者、訳者も参加するビショッポ学会があるほど英米圏では知られているが、ロタについてはブラジルでは忘れられていたものの、リオ市政 450 周年記念行事に「市のヒロインたち」7 人の女性の一人として挙げられ名誉回復がなされた。

〔桜井 敏浩〕



『新版 現代ブラジル事典』

ブラジル日本商工会議所・『新版 現代ブラジル事典』編集委員会編 新評論
2016 年 4 月 256 頁 3,500 円+税 ISBN978-4-7948-1033-5

「資源大国」「グローバル経済の最前線の一つ」「アマゾン地域自然破壊に代表される地球環境問題のスポット」「多人種・多文化社会」など様々な顔をみせるブラジルのいまを、多角的視点での 180 余の項目を 50 名の研究者、官民実務者などが解説している。

7 章構成で、「日本とブラジル」（編集―山崎圭一・桜井敏浩）は日系ブラジル人、外交・貿易・投資関係、経済・技術協力、文化・スポーツ交流を、「政治と外交」（子安昭子）は政治の流れと政府・政治アクター、外交を、「経済」（浜口伸明）は経済構造、財政、対外関係、雇用と所得を、「産業」（二宮康史）は産業発展・政策、企業、主要産業の状況を、「社会政策・社会運動」（近田亮平）では教育・医療保健・貧困対策と社会扶助、治安、マイノリティ、社会運動などを、「環境と開発」（丸山浩明）は気候変動と環境政策、アマゾン・パンタナール・ノルデステの環境と開発、都市化・都市環境、クリチバの事例に見る環境都市の可能性を、「法制度」（阿部博友）は憲法・法規範、司法制度、刑法・刑法訴訟法、民商法、企業法・資本市場法、経済法、税法、労働法、環境法、民訴法、倒産法、仲裁法、市民生活関連法を網羅している。これに略号、年表、人名・事項索引が付く。

記述は主として 21 世紀に入ってからに絞っており、自然・地理・歴史・文化等と 20 世紀までの記述は 2005 年に出版された『現代ブラジル事典』（新評論刊）を参照し併せ使うことで、極めて有用なブラジル総合事典となっている。〔桜井 敏浩〕



『ポルトガル語圏世界への50のとびら』

上智大学外国語学部ポルトガル語学科編 上智大学出版発行・ぎょうせい発売
2015年12月 428頁 2,000円＋税 ISBN978-4-324-10016-5

ポルトガル語は本国、ブラジルで使われているほか、モザンビーク等アフリカの5カ国とアジアの東ティモールの8カ国で公用語となっている。そのほか日本での日系ブラジル人やかつての東洋貿易の拠点だったマカオ、前記の国の人びとが故国から移り住んでいる土地でも使われており、「ポルトガル語圏」は世界に広がっている。本書はそれらの国や地域にどのような人たちが暮らし、社会を構成し、歴史・文化があり、どのような問題を抱えているかを、50の切り口から各分野の12人の研究者・翻訳者が解説するものである。

5章構成で、まず「振り返る」では歴史、革命、歌、映画などを、「交わる」では外交からコーヒーを通じての交流、世界で活動するブラジル企業、宗教、外国移住者と言語を、「闘う」では植民地の独立、移民・移住者、アマゾン環境保護の挑戦、先住民やアフロ文化の浸透を、「楽しむ」ではサッカーはじめブラジルの文芸・演劇・音楽・料理を、「夢見る」ではブラジルのテレノベラ（連続テレビドラマ）から東ティモールの独立やブラジルの資源と開発、教育、多人種社会とファベラ（貧困者集住地域）の存在、日本でのブラジル人による多文化共生に至るまでを取り上げている。

ポルトガル語圏の世界を知るために実に様々な手法とアプローチで簡潔に解説しており、まさに人種のるつぼを表す際に使われる“サラダボール”の如き魅力を感じさせる比較文化評論の試みである。

〔桜井 敏浩〕



『他者の記号学＜新装版＞ アメリカ大陸の征服』

ツヴェタン・トドロフ 及川 夔・大谷尚文・菊地良夫訳 法政大学出版局
324頁 4,200円＋税 ISBN978-4-588-09982-3

ブルガリア出身でフランスに帰化した文芸評論家が、スペインのアステカ・マヤの征服史を記号学から分析したもの。「他者」は、本書ではスペインに代表される当時の欧州の文化に対する先住民のインディオを指しており、欧州の近代化が始まろうとした時に、他者との関係がどのように変遷していったかを見ることによって、世界を完結的で自己充足的な統一というギリシャ哲学以来の欧州思想の限界を、アステカ征服史を通じて示している。

コロン（コロンブス）の“発見”とコルテスの征服は、そもそもはラテン語圏文化以外の言語、文化、主体性をもつ「他者」を認識していなかったことが、その後の略奪、植民地主義、奴隷制に繋がった。コルテスが黄金収奪よりもマリンチェを使って情報収集を重んじてインディオをより知ろうと努めていたこと、一般的に使われる文字を持たなかったアステカ人に対してスペイン人のコミュニケーション能力の差が強さの源泉の一つであったこと、年代記作者（クロニスタ）のサアグンが情報提供者たるインディオの声とスペイン人作者である自身の双方の声を対他関係という視点から見ようとしていたこと、平等の中で差異のある他者を認知しようとしたラス・カサスも、はじめは兵士ではなく修道士と農業移民による非暴力の植民地化を主張して失敗していることなど、多くの史話が散りばめられていて、全体に難解な論理ではあるが、興味を引きつけている。

なお、トドロフには『アステカ帝国滅亡記ーインディオによる物語』（G. ボド共編 法政大学出版局 1994年）の著作もある。

〔桜井 敏浩〕



『アルゼンチンのユダヤ人 - 食から見た暮らしと文化』

宇田川 彩 風響社 2015年10月 65頁 800円+税
ISBN978-4-89489-784-7

アルゼンチンには約20万人のユダヤ人がいるといわれ、その多くはロシア・中欧等からの移住者だが、「ユダヤ人」とはユダヤ法の定義ではユダヤ人の母から生まれユダヤ教に改宗したもの」といっても、アイデンティティやヘブライ語の習得度等多様であり、非ユダヤ教徒との結婚も多くなっている。本書は、著者（東京大学総合文化研究科博士課程在学）がアルゼンチンで2年間ユダヤ人家庭の日常生活に入って現地調査を行った成果を基に、3つの家庭での食生活において安息日や過ぎ越しの祭りの日の食事、英語だと“コーシャ”と呼ばれるユダヤ教の食餌規定に則った食べ物の使用度合いから、何をどのように食べるかという生活様式と宗教実践の考え方をみようとしたものである。

アルゼンチン人といえば、アサード（焼き肉バーベキュー）とマテ茶が欠かせないが、ほとんどのユダヤ人もこれを好み、食べたものが身体の一部になるとの考えからのコーシャをどの程度守るかは、個人が好むと好まざるとにかかわらず、国際情勢、国内政策などの影響を受けるのだが、口にすることは自ずから制限があるものの舌と身体に刻みこまれた習性は他の生活様式と比べ残りやすいとの考えから、“食”を通じてみたアルゼンチンのユダヤ人の考察である。今後の一層の研究の深化と他教との比較などが期待される。

〔桜井 敏浩〕

佐藤・堀法律事務所 -SATO & SATO LAWYERS-

<http://shinsuke-nagayoshi.com/>



弁護士 永吉 慎介
NAGAYOSHI SHINSUKE



佐藤・堀法律事務所では、中南米を知り尽くした弁護士永吉慎介が、クライアント様の中南米でのビジネスをお手伝いさせていただきます。

弁護士永吉慎介は、コロンビア、グアテマラ、ブラジル、中国、フィリピン等に在住経験があり、スペイン語、ポルトガル語共にネイティブと変わらないレベルで運用ができます。
英語、スペイン語、ポルトガル語、中国語で、事実の調査から法的な交渉まで、行うことができます。

中南米のよいところも悪いところも知り尽くした当事務所に、クライアント様のお手伝いをさせて下さい。



佐藤・堀法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座
2-3-19 銀座深田ビル4F(執務室)
TEL: 03-5524-1110
FAX: 03-5539-4701
E-mail: lawsn@shinchi.cc